

Title	ヴェルツブルクのシーボルト家：日独で女医を輩出した医学家系
Sub Title	Die Würzburger Mediziner-Familie von Siebold. : Ärzte und Ärztinnen der Geburtshilfe im 18. und 19. Jahrhundert.
Author	石原, あえか (Ishihara, Aeka) 眞岩, 啓子 (Maiwa, Keiko)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2011
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. ドイツ語学・文学 (Hiyoshi-Studien zur Germanistik). No.47 (2011.) ,p.189- 215
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	小林邦夫教授 退職記念号 = Sonderheft für Prof. Kunio KOBAYASHI
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10032372-20110331-0189

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ヴェルツブルクのシーボルト家

——日独で女医を輩出した医学家系——

石原あえか、眞岩啓子

1. 日本におけるシーボルト研究動向概観 および本論のねらいと構成

近代日本における女医¹⁾という言葉から、おそらく多くのドイツ語関係者は、まず長崎・出島に駐在したフィリップ・フランツ・フォン・シーボルト (Philipp Franz von Siebold, 1796–1866; 以下、彼を「シーボルト」と記し、その親族については基本的に名前を記す) と其^{その}扇^{まき}こと楠本瀧の間に生まれた娘、楠本イネ (1827–1903) を連想するのではないか。幼くして生別した父と同じ医学の道を志したイネは、父の高弟であった二宮敬作にオランダ語と外科を、また石井宗謙に産科を師事した。シーボルトの再来日を機にオランダ医師ボンベ、ボードウィン、マンスフェルトらにも師事、最新の西洋医術を身につけた後、1870年に異母弟の支援を受け、東京・築地に産科医院を開業した。1873年には福澤諭吉の口添えで、宮内省御用掛として明治天皇の女官・権典侍葉室光子の出産に立ち会った。しかし1875年から医術開業試験が導入され、当初、女性には受験資格がなかったことから、以後、彼女は「医師」ではなく「産婆・助産婦」に限

1) 本論は、平成22年度から3年間の予定で採用された科学研究費補助金・基盤研究(C)「近代ドイツと日本の医学交流 産科医・女医の誕生・伝染病予防をめぐる」(課題番号22500964)の研究代表者・石原と研究協力者・眞岩による初年度成果報告のひとつである。

った活動を余儀なくさせられた。

ちなみに日本におけるシーボルト研究の嚆矢といえ、^{くれしゅうぞう}呉秀三の1,500ページを越す大著『シーボルト先生 其生涯及功業』（東京：吐鳳堂1927）があり、オランダ語からの誤訳や著者の判断による文書の割愛といった問題が指摘されてはいるものの、今なおスタンダードな伝記兼研究書として知られる。2003年に八坂書房から刊行された『新シーボルト研究』²⁾によれば、シーボルトに関する国内研究論文は1,000件を超えるという。しかし当然とはいえ、概して研究対象は「日本学者シーボルト」であり、父の影響下で幕末から開国後の近代日本と密接な関わりを持ったふたりの息子アレクサンダー（Alexander von Siebold, 1846–1911）とハインリヒ（Heinrich von Siebold, 1852–1908）³⁾にはほぼ限定される。特にシーボルトと長子アレクサンダーについては、1974年に竹内精一訳によるハンス・ケルナー著『シーボルト父子伝』が東京・創造社から刊行されているが、本書はドイツ語基本研究文献のひとつ、660ページ強の*Die Würzburger Siebold. Eine Gelehrtenfamilie des 18. und 19. Jahrhunderts*（『ヴェルツブルクのシーボルト家』1967、ライプツィヒ）の部分訳である。ヴェルツブルク・シーボルト家を興した祖父カール・カスパルに始まり、その4人の息子達が築いた各家庭の歴史を詳述した価値の高い文献であるが、その専門性とボリュームが災いして、現時点でも日本語による全訳はない。

他方、2010年は徳川幕府がオランダに対する貿易許可書「朱印状」を初めて発行してから401年目にあたり、日蘭通商400周年記念特別展『阿蘭陀とNIPPON レンブラントからシーボルトまで』が、渋谷の「たばこ塩の博物館」を起点に日本国内を巡回した。この記念展で注目すべきは、近年再評価の進むシーボルト日本滞在中の出島絵師・川原慶賀

2) 石山禎一他編（全二冊）の『1. 自然科学・医学篇』序文S.9ほか参照。

3) 彼らの収集コレクションについては、1996年に江戸東京博物館で開催された里帰り展『シーボルト親子の見た日本』などに詳しい。

(1786-1865?)を取り上げていることである(同記念展カタログ S.105-129, 「シーボルトと川原慶賀」参照)。2004年刊行のねじめ正一の歴史小説『シーボルトの眼』(集英社)というタイトルそのままに、まだ写真がなかった時代の貴重な記憶手段として、当時の日本文化・風俗を活写した人物として知られる。だが、同時に川原は、瀉血や外科手術といった西洋医学関連の学術的記録画も遺した。この意味で、川原慶賀の再評価は、近年同様に注目されつつある、1800年前後に自然科学分野を専攻する学生に必要な不可欠だったスケッチ技能を身につけさせるため、ドイツの諸大学が専任で雇った絵画教師達の活動⁴⁾とも比較する価値があるだろう。

さて、続く2011年は、日独修交通商条約締結150周年(但しこの「ドイツ」は「プロイセン」を指す)にあたる。前述したケルナーの『ヴェルツブルクのシーボルト家』巻末には、ドイツ側の家系図がある。楠本瀧・イネ母子の日本側系図は記されていないが、興味深いのは、ドイツ側シーボルト家系図上にも、近代的医学教育を受けた先駆的女性医師および医学博士の名前が見出せるという事実である。つまりヴェルツブルクのシーボルト家は、特に意図しなかったにせよ、結果として日独双方において、近代的女医を誕生させた一族となるが、この事実を知る人はまだ少ないようである。本論では、ケルナーの原書、特に未訳部分を活用しつつ、近代日独両国における女医誕生に稀有な役割を果たした一族の、これまであまり知られていない経歴を紹介することを目標とする。なお、共著論文の性格上、ここに本論の構成と執筆責任分担を明らかにしておく。

4) Vgl. z. B. Heinstein, Patrik/Wegner, Reinhardt: *Mimesis qua Institution. Die akademischen Zeichenlehrer der Universität Jena 1765-1851*. In: ‚Gelehrte‘ Wissenschaft. Das Vorlesungsprogramm der Universität Jena um 1800. Hrsg. v. Thomas Bach, Jonas Maatsch und Ulrich Rasche. Stuttgart (Steiner) 2008, S.283-301.

1. 日本におけるシーボルト研究動向概観 および本論のねらいと構成
(石原)
2. シーボルトの祖父カール・カスパルと父クリストフ (眞岩)
3. シーボルトの叔父ダミアンと名誉医学博士になった叔母ヨゼファ
(石原)
4. 正規の女性医学博士シャルロッテ・ハイデンライヒ (石原)
5. シーボルト家の三男バルテルと四男エリアス (眞岩)
6. 今後の研究展望 近代日本の女性医師とドイツのかかわり (石原)

2. シーボルトの祖父カール・カスパルと父クリストフ

シーボルトの祖父カール・カスパル・フォン・シーボルト (Carl Caspar von Siebold, 1736–1807) は軍医の父ヨハン・クリストフ・シーボルト (Johann Christoph Siebold, 1701–1766) と母エステル (Esther von Siebold geb. Brüninghausen, 1698–1755) の5番目の子として、アイフェルのニーデッゲンに生まれた。ニーデッゲンの初等学校とラテン語学校に通った後、父の方針で大学入学準備のために隣町デューレンのイエズス会師のもとへ送られた⁵⁾。16歳でケルン大学に入学、最初の数年は論理学、数学、自然学を学ぶとともに、英語、フランス語、イタリア語の授業も受けた。1754年教養課程を修了すると、病気の母の影響もあり、医学(外科技術)を修める決心をした。後に偉大な医師となる彼の出発点は、この外科技術の習得とフランス軍の野戦病院での3年にわたる勤務であった。この職に巡り合ったのは願ってもない幸運だった。治療を通じて長い伝統をもつフランスの最新外科学を習得することができるばかりか、解剖学や外科手術、

5) この章は主にハンス・ケルナー著『ヴェルツブルクのシーボルト家』(1967)を参考にした。なお以下、本書からの出典は、Körner とのみ記し、引用もしくは参照ページ数を記載する。

医学の理論面についての授業も受講できたからである。ヴェルツブルクとの繋がりもこの病院にあった。1760年フランス軍総司令部が有能な外科助手のヴェルツブルク派遣を決めた時、カスバルもメンバーに入っていた。

ヴェルツブルクで、カスバルはユリウス病院の手術担当医で解剖担当、助産師長のクリストフ・シュタング（Christoph Stang, 1703–79）と知り合い、軍の病院へは戻らず、助手として彼を支えることに決めた。1760年11月カスバルは大学にも通い始めたが、当時の医学部の状況とは言えば、学生数もきわめて少なく、学習環境も悲惨なものだった。ちょうどこの頃、またもやカスバルのもとに幸運が舞い込む。彼の評判を耳にした君主が研究のための旅行を勧めてくれたのである。

最初の訪問地パリでは、外科医ジョルジュ・ド・ラ・フェ（George de la Faye, 1699–1781）の家に下宿し、解剖学、外科学、産科学を聴講するとともに、手術や助産の技術も学んだ。約一年半のパリ滞在後、彼は結石切除の技術を向上させるべく、ノルマンディー地方ルーアンの外科医を訪ねた。ドーバー海峡を渡りロンドンではセント・ジョージをはじめとする優れた病院を見学し、著名な医師たちとも交流したが、ここでの一番の収穫は天然痘予防接種の経過と結果を観察できたことである。カスバルは帰国後ヴェルツブルクで予防接種を披露している。

ヴェルツブルクに戻ると、カスバルは外科担当侍医に任命され、その後シュタングの後任となった。1769年8月21日に医学博士号を取得した。教授となったカスバルの担当科目は外科学、解剖学、産科学である。

外科は彼の出発点であり、それゆえもっとも愛着を持っていた分野であった。この外科をめぐる当時の状況は今日とは異なっていた。理論的なことを学ぶ「外科学」とその実践としての「外科手術」は全く別個のものと捉えられていた。多くの外科学教授は、理論は語れたが、それは手術ではほとんど通用しなかった。彼らは自分で執刀することはなく、手術は手工業的な技をもつ者に任せるのが常であった。イギリスやフランスとは異なり、当時のドイツでは、手術担当医は理髪師（床屋医者）と同等、職業的

に低い身分と見なされていた⁶⁾。その原因は、これまで手術を行ってきた者の知識・能力の欠如による医療過誤、そこから生じる手術に対する不安と偏見にあった。カスバルは常に手術担当医の地位向上を意識しており、地位向上が最終的には医学全体の発展にも結びつくと考えていた。このことも視野に入れて、彼は常に適切な治療と完璧な手術を目指し、患者の治療や手術のために遠出することも厭わなかった。当然のことながらカスバルは、同一人物が外科学の講義も執刀も行うべきという見地に立ち、自らもそれを実践した⁷⁾。こうして学生も、理論を講義室で、実践を病人のベッドと手術台で学ぶこととなった。カスバルの啓蒙の配慮はこれに留まらず、たとえばこれまで学生など特定の者にしか開放されていなかった手術室への入室を、理髪師とその弟子にも許可している。

外科手術と密接な関係にある解剖学も、ドイツではまだ軽視されていた。カスバルは医学にとって解剖学がいかに重要かを認識し、解剖学の授業の充実に努めた⁸⁾。彼が何よりもこだわったのは、授業の際に実際に死体を使って理論と実践の両面から学ぶこと、同時につねに生理学および外科学との関連を意識することである。解剖授業のために学生たちは、動物の死骸を探したり、時には墓地から死体を掘り起こしたりしたという。

産科学の領域の構図も当時はきわめて曖昧だった。産科学を聴講するのは医学生だったが、古くからの産婆間の規定により、男子学生の産室への

-
- 6) ヨーロッパでは中世から手術を行う者は地位が低く収入も少なかった。そのため理髪師として生計を営みながら、要請があれば手術を行うのが一般的であった。石原あえか：「人体観察の記録——近代ヨーロッパおよび日本における解剖図・標本・立体模型——」In：『生命を見る・観る・診る』慶應義塾大学出版会 2007年、S.187-212ほか参照。
- 7) 以後、外科学は活気づく。彼の外科医としての有能さを示す例として、1768年秋の結石切除、1780年の耳下腺手術、何度も行われた内障手術などがある。
- 8) カスバルはドイツ近代外科学の創始者とされるヘルムシュテットのローレンツ・ハイスター（Lorenz Heister, 1683-1758）を招聘しようとしたが、大学側に拒否された。

立入りは禁じられていた。産科技術は助産婦に委ねられ、しかも世襲が常であった。とはいえ、まともな教育を受けた助産婦は少なく、特に田舎では皆無だった。出産の際の危険を少なくするためにも、助産婦の教育と産科学を学ぶ学生のための実践的授業は並行されなければならなかった。ヴェルツブルクでは産科学は外科学の領域とされており、産院はなかったので、カスパルは学生たちを引率して助産婦を訪ねた。1777年には助産技術を学ぶための体制作りが始まり、この分野に教授と手術担当医が配置された。国による産院の設立、助産婦学校の設立と資格取得のためのプログラムの制度化は、息子のエアスの時代を待たなければならない。

このようなカスパルの教育方針と医師としての高い技量が評価され、ヴェルツブルク大学とユリウス病院は、まもなくゲッティンゲン大学と並ぶ高水準の教育施設という名声を得た。カスパルの入学時には7人の学生しか在籍しなかった医学部には、今や国内のみならず隣国からの入学者もあり、また助産婦を目指す女性たちも集まった⁹⁾。さらに教育を向上させるには施設の整備も欠かせなかった。カスパルは産院の建設と解剖学棟の拡張計画を政府に請願した。前者は却下されたが、後者の計画は認可され、1786年末にはふたつの標本室ができあがり、その他の部分もおおよそカスパルの希望に沿って改築された。1788年7月には解剖劇場（中央に置かれた解剖台の様子を周囲から見ることのできる円形劇場のような教室）も完成した¹⁰⁾。解剖学棟に続いて1791年にはユリウス病院も改修された。この年の病院側が出した規定書には、外科医の地位向上を示すような一文がある。「ユリウス病院でこれまで外科グループと呼ばれていたものは、

9) ヴェルツブルクの学生教育が疎かになると政府から非難されたが、これに対してカスパルは、彼らの共通の祖国はドイツである、と答えたという。Körner, S.38 参照。

10) 『ニュルンベルク教養新聞 *Nürnbergische Gelehrte Zeitung*』に掲載された落成式の式辞でカスパルは、医師にとっての解剖学の必要性を強調した。解剖劇場については石原（注6）の S.192ff. 参照。

今後は公的な外科診療科となる」¹¹⁾。

カスパルの行った一連の改革は国内外に知れわたった。1788年にイェーナで刊行の『一般文学新聞 *Allgemeine Literaturzeitung*』は、イギリスやフランスが輩出した偉大な外科医に比肩するドイツ人としてカスパルの名を挙げている。彼の医療に対する姿勢に共感した友人や同僚は、カスバルがこれまで書き留めてきた診療や手術の際の経験と新たに得た知見を公にすることを勧めた。この要望を受け、1792年にニュルンベルクのグラッテナウアー出版からカスパルの『外科日記 *Chirurgisches Tagebuch*』が出版された。彼はここに「私は観察者であり、経験を伝えるつもりだった」¹²⁾と記しているが、これは、書物から得られる知識も必要だが、医師にとっては日々の経験の積み重ねがはるかに有益であるという彼の考えや教育方針をうかがわせる。観察と実践を重視する姿勢は、シーボルト家の息子たちにも受け継がれていった。

図版や資料の収集・補完、標本の作製にもカスバルは力を注いだ。彼は息子クリストフと協力して、これらの作業を行った。クリストフの死後、彼の収集品は父のものと合わせて、バルテルに引き継がれた。1812年当時、解剖学キャビネットには680点の乾燥標本と501点の液浸標本があった。医療器具のコレクションの約半分も自費で購入したものである。「器具を持たない外科医は、帆と櫂のない船と同じ」¹³⁾と彼は述べていた。それほど器具の重要性を認識していたということである。その中には、師ド・ラ・フェが遺した医療器具の銅版画45枚も含まれており、これを基礎にして外科器具の図解書を作成する予定であった。さらに彼はある腕の立つ刃物鍛冶に医療器具を試作させている。この事実から、ヴェルツブルクを近代の整形外科発祥の地とするのも、あながち的外れではなか

11) Körner, S.54.

12) Körner, S.58.

13) Körner, S.65.

ろう¹⁴⁾。

1802年、ヴェルツブルクはバイエルンに統合された。カスパルは外科医長の地位を息子バルテルに譲るが、この年ヴェルツブルクの第一衛生事務官に任命された。町や田舎の外科医、助産師・助産婦の雇用と配置、俸給に影響力をもつこの立場は、彼が行おうとしている産科医療の改革を推進するうえできわめて好都合であった。しかし、この年カスパルは卒中発作をおこす。治療の甲斐あって仕事に復帰するも、再び体調を崩し、療養を余儀なくされた。この療養期間を彼は、雑誌『ルツィーナ *Lucina*』への論文執筆と、『外科日記』の続編の準備にあてた。1807年4月3日カスパルは70歳と4ヶ月で逝去した。父の死後、バルテルは父の伝記を出版した。

カスパルの長男、シーボルトの父クリストフ・フォン・シーボルト (Christoph von Siebold, 1767–1798) は1781年11月26日にヴェルツブルク大学に入学した。哲学を学んだ後、自然科学と薬学を専攻し、さらに数学、物理学、植物学、生理学も修めた。解剖劇場では、フランツ・カスパル・ヘッセルバッハ (Franz Kaspar Hesselbach, 1759–1816) と父カスパルの監督下で、死体一体を単独で解剖した。父からは外科の手の動きと産科学も学んだ。1785/86年の冬学期にはニュルンベルク大学に移籍したが、クリストフの目当ては大学そのものではなく、ニュルンベルクの開業医クリストフ・ヤーコプ・トロイ (Christoph Jacob Treu, 1695–1769) が遺した博物標本室付きの有名な蔵書コレクションだった。在籍期間が短かったにもかかわらず、父のおかげでクリストフは自由に図書館を利用できた。

1786年5月には、創立50年足らずにして、教育水準の高さと充実した設備によって注目を集めていたゲッティンゲン大学に移籍、ここでも医学を専攻する。ここでクリストフは、産院のヨハン・ハインリヒ・フィッシャー (Johann Heinrich Fischer, 1759–1814) により産科学への興味を

14) Körner, S.56.

呼び起こされた。また図書館への入室を特別に許可してもらい、解剖学と生理学の書物を読み漁った。1789年、ゲッティンゲン大学に「お産椅子」¹⁵⁾についての論文を提出し、医学博士号を取得した。

翌年ヴェルツブルク大学の一般医学、食餌療法、産科学の助教授に就任後最初の1790/91年冬学期の講義内容は、梅毒の新生児への感染についてだった。産科学担当としてクリストフがまず目標としたのは、産室の確保であった。ウィーン滞在時に産室の必要性を知った彼は、ユリウス病院の癲癇患者室を転用することを考え、政府に詳細な提案書を送った。この提案は拒否されたが¹⁶⁾、町の助産婦が住んでいる地区にある建物を一時的に産室として使用できるようになった。1791年12月17日に開室、翌年2月には帝王切開も行われた。常時妊産婦8人の受け入れが可能で、授産費用やその他身のまわりのものは医学生などの援助に頼っていた。産室開設に伴い、助産技術の実践的授業、病気の妊産婦や新生児に関する授業も行われた。この経験は1794年に『手と器具による助産学に関する体系的記述 *Systematische Darstellung der Manual- und Instrumental-Geburtshilfe*』としてまとめられ、その後長い間、入門書として用いられた。

父カスバルの場合と同様、医師としてのクリストフに大きな影響を与えたのは、研究旅行である。1792年に訪れたウィーンでは市民病院の清潔さ、産院設備の完璧さに感服したが、他方、外科医の知識の欠如には驚かされた。また父の弟子がイタリア・パヴィアで開いていた診療所も見学した。ドイツにない長所をもつイタリアの医療施設改善計画には参考にすべき点が多かった。解剖劇場も立派だったが、それ以上に目を惹いたのはイタリア人外科医の執刀の巧みさであった。

こうした旅行体験は、教育面でも大いに役立った。クリストフは大学や

15) 座産用の椅子で、16世紀から17世紀にかけてヨーロッパに普及し、19世紀頃姿を消す。日本語による文献では、長谷川まゆ帆著：『お産椅子への旅 ものと身体の世界人類学』岩波書店 2004年が詳しい。

16) 実現するのは、弟のエリアスが勤務する時期になってからのことである。

病院での教育が一面的なものになってしまう危険性を指摘し、眼で見ること、体験することの重要性を説いた。1794年に正教授兼病院の第二医師に昇任、教育や施設の改良にも関与できる地位に就いた彼は、ヴェルツブルク大学医学部およびユリウス病院とこれまでに訪れた他の医療機関を比較・検討し、その長所と改善点をまとめた¹⁷⁾。また、学生には以下のような指示を与えている。まず基礎教育期間に理論内容を修め、ある患者を専属で担当し、ラテン語で日誌をつけること、実習生として急性疾患と慢性疾患をいずれも半年ずつ学ぶこと、続く段階では、患者を診察し、論文を執筆し、最終的には博士論文を提出することである。

生理学と産科学の授業、個人的な講義、第一医師としての仕事、市内および田舎での診療、これら全てを良心的に遂行することにクリストフは無上の喜びを感じていた。彼はまた薬学全般にも注意を払ったが、それは理論を実践に正確に結びつけることが何よりも重要だと考えたからである。この間に彼は肺結核、梅毒、顔面神経痛、産科学についての論文を執筆し、その多くはシュタルク一世（もしくは「大シュタルク」。Johann Christian Stark, 1753–1811）、ローダー（Justus Christian Loder, 1753–1832）、バルディングー（Ernst Gottfried Baldinger, 1738–1804）が主宰する雑誌に掲載された。

仕事に追われる日々のなか、彼は博士論文で扱ったお産椅子についての研究を続け、博士論文の抜粋を出版しようと計画していた。しかし1797年秋から病気がちになり、翌年1月18日、母と祖母と同じ肺結核で31歳の生涯を閉じた。未亡人となったアポローニアは息子フィリップとともに兄のもとに身を寄せた。

17) 『ヴェルツブルクのユリウス病院における現在の設備に関する仮報告書 *Vorläufige Nachrichten von der gegenwärtigen Einrichtung des Klinikums an dem Julius-Hospital zu Würzburg*』（1795年春に印刷）。

3. シーボルトの叔父ダミアンと名誉医学博士になった叔母ヨゼファ

シーボルトの叔父ダミアン (Damian von Siebold, 1768–1828) はヴェルツブルク大学で学んだ後、1789年冬学期からゲッティンゲン大学に移籍し、父カスバルに内緒で同大学の博士号を取得した。彼の指導教授アウグスト・ゴットリーブ・リヒター (August Gottlieb Richter, 1742–1812) は父の友人のひとりだったが、長兄に続いて次男も留学先、つまり他公国の大学で学位を取得するのは主君の機嫌を損ねるとして、父が許さないと判断したためである。案の定、事が公になるとダミアンは父の逆鱗に触れ、仕送りは即刻停止、これまでの留学資金を全額返却するよう命じられる。長兄クリストフや大学同僚のとりなしも空しく、以後彼は勘当状態、指導教授の口利きで、なんとかハイリゲンシュタット (現テューリンゲン州アイヒスフェルト郡) で開業できたのだった。

この開業医ダミアンのもとに運び込まれた重篤患者が、22歳の若き未亡人、のちのダミアンの伴侶であり片腕となるヨゼファ (Josepha von Siebold geb. Henning, 1771–1849) だった。ヨゼファはアイヒスフェルト郡官吏ヨーゼフ・ヘニングの娘として誕生したが、2歳足らずでハイリゲンシュタット市長を務めていた伯父に託された。家庭的幸福にも子宝にも恵まれなかった彼は、姪ヨゼファに最高の教育を施すべく、乗馬を習わせ、視察にも同伴した。7歳から2年間、ゲッティンゲン大学教授 (=ダミアンの指導教授) リヒター家に下宿させて学校に通わせ、堅信礼まで女子修道院で教育を受けさせた。この伯父であり養父だったローレンツ・ヘニングが全財産を彼女に遺して1786年秋に亡くなると、未亡人との間に相続問題が持ち上がる。この時窮地から救ってくれた二廻り以上年の違う後見人ゲオルク・ハイラント (1746–1793) とまもなくヨゼファは結婚し、4人の子供が生まれたが (うち息子2人は夭折)、瀉血中の不手際で夫は急逝してしまう。まもなくヨゼファも病床に伏し、生命が危ぶまれた。こ

の時、結婚後も親交のあったリヒター教授が、弟子ダミアンに彼女の治療を要請したのである。8週間にわたる献身的な治療により、ヨゼファは健康を取り戻し、逆に彼女が今度は自らが病を得たダミアンを看病するうちにふたりは急速に接近——しかしこの時、すでにヨゼファの再婚相手としてヴェーベキント教授が親類の中から選ばれており、婚約を破棄された彼は、以後、長期間にわたってダミアンの出世を妨害した——1975年春に結婚式を挙げた。ヨゼファの連れ子シャルロッテ（次節参照）とテレゼも、マインツ公からシーボルト姓を許された。

しかしダミアンと父の関係は、未だ勘当状態、子連れ未亡人との結婚はさらなる悪評をもたらしたただけだった。父子の和解を成し遂げるべく、ヨゼファはヴェルツブルクに赴き、義父への直接説得を試みる。美しく聡明で快活なヨゼファを前に誤解は解け、義父カール・カスパルは、すでに妊娠していた彼女に、和解の徴として愛用の^{かんし}鉗子を、「義娘よ、この医具は貴女にとって二重の助けになるだろう」¹⁸⁾という予言めいた言葉とともに手渡したという。

当初、開業医ダミアンの懐は潤っていたし、ヴォルムスに活動の場所を移してもしばらく経済的不安はなかった。しかしヨーロッパ全土に波及したフランス革命戦争は、一方で負傷兵治療の功績によりシーボルト一族に貴族に列する榮譽（男爵位）を与えたが、他方でダミアンの経済事情を苦難に陥れた。1804年にヴォルムスからダルムシュタットに移住しても家計は悪化するばかり、精神的にも肉体的にも疲れ切ったダミアンは心を病んでしまう。大黒柱を失った家庭の困窮はありがちな話だが、この時ヨゼファは思い切った行動に出た。夫の診療所を助けるため、ヴェルツブルク大学教授・義弟エリアス（第5節参照）のもとで助産婦技術講習を受けることを決意、家のことは長女シャルロッテに任せ、単身ヴェルツブルクに赴いたのである。ヨゼファは1807年夏学期の助産婦講習を無事修了したが、ダミアンが予想した通り、女性教育に保守的な弟エリアスは、義姉

18) Körner, S.118f.

に対しても助産婦として必要な技術以外を教えることはなかった。

ダミアンは政治・外交的能力には恵まれていなかったようだ——実際、他の兄弟が大学教授として順調にキャリアを積んでいったのに対し、彼のみ実務に専念、出世も遅く、学術著作も乏しい——が、女性教育についてはおそらくシーボルト家の4兄弟中、最も偏見のない人物であったと推測される。ヨゼファにゲッティンゲン大学で研鑽を積ませ、博士号をとらせる腹案こそ放棄したものの、弟が教えなかった産科技術を彼は妻に惜しみなく伝授した。産科医としてだけでなく、眼科医として内障手術もこなし、種痘はもとよりチフス等の伝染病予防・治療にも従事する激務の合間、ダミアンは妻に産科理論と実技を教えた。夫との学習で自信をつけたヨゼファは、ヘッセン大公国医学会に産科医 (Accoucheuse) としての国家試験受験を申請、1807年11月10日、4時間にわたる厳正な試験に見事合格、同年11月28日には種痘医の資格も得た。以後、ダミアンとヨゼファはともに医療に従事し、また自宅一部を開放しての助産婦講習も共同で担当するようになった。現代風に言えば、Dual-Career Academic Couples¹⁹⁾ (=研究者同士の結婚をさす) としての活動である。幼少時に乗馬を習ったヨゼファは、単独で馬あるいは馬車を駆って遠方の往診もこなした。だが、1814年9月18日の往診中、馬車の事故により大怪我を負い、その後5ヶ月間病床にあった。ちょうどこの時、夫ダミアンは、ヨゼファと前夫の娘で養女となったシャルロッテに学位試験を受けさせるようギーセン大学と交渉中だった。そしてこの機会に彼は、娘だけでなく、医療活動に貢献してきた妻ヨゼファにも「名誉医学博士号」を授与するよう請願したのだった。この請願は受理され、1815年9月6日付でギーセン大学からヨゼファに名誉医学博士号が贈られた。あわせてヘッセン大公から固定年給と馬2頭の支給も決められた。

しかし依然として夫妻の家計は苦しかった。ついに1817年、ダミアン

19) 小川真里子：『女性と科学技術 人材問題に焦点を定めて』科学技術社会論研究第7号（2009年10月）S.9-19, hier S.14ff. 参照。

の堪忍袋の緒が切れて、ダルムシュタット移住以来13年にわたるヴェーデキントの妨害、不当な扱いや支払いの滞りを陳情したことで、ようやく事態は改善されたのだった。この間、ダミアンとヨゼファには7人の子供が生まれたが、うち3人の娘は早世している。長男カール（Carl von Siebold, 1800–1860）は、まずギーセン大学に進学し、父同様ゲッティンゲン大学で博士号を得た。まもなくヘッセン大公軍に軍医として入隊、最終的には軍医少佐（Oberstabsarzt）になった。

ダミアンは特に眼科医および外科医としての実務で本領を発揮し、1828年12月6日に還暦で世を去った。ヨゼファは診療所をシャルロッテ夫妻に譲った後、慈善活動を行いながら、時折近郊に住む子供や孫を訪ねたり、馬車の遠出を楽しんだりするような穏やかな老後を送り、1849年に73歳の生涯を閉じた。

4. 女性医学博士シャルロッテ・ハイデンライヒ

前述したように、ヨゼファと前夫ハイラントの間にはふたりの娘がいた。彼女達をダミアンは養女にし、シーボルト姓を与え、実子と同様の教育を受けさせた。このうち長女シャルロッテ（Charlotte Heidenreich gen. von Siebold geb. Heiland, 1788–1859）は両親に医学、特に産科の道に進む意志を表明した。ダミアンはまず彼の医学・解剖学関連蔵書を読むことを許可し、それから2年かけて、かつて妻が義弟エリアスから習った助産婦講習内容を、模型および実地でシャルロッテに教授した。彼女がヨゼファの不在時は助手代行も務められるまでになると、ダミアンは1811年末に彼女をゲッティンゲンに送り、いずれも同大学医学部教授だったオシアンダー（Friedrich Benjamin Osiander, 1759–1822）、ブルーメンバッハ（Johann Friedrich Blumenbach, 1752–1840）、ランゲンベック（Conrad Johann Martin Langenbeck, 1776–1851）の個人授業を受けさせた。ダミアンが磨いた娘の才能は

同僚達にも認められ、彼らの尽力もあり、1814年には、シャルロッテにダルムシュタット市および近郊で産科医として公的活動許可が下りる。この時、ヘッセン大公は講義修了証だけで無試験のまま許可を与えることに難色を示したが、ダミアンは逆にこれを好機ととらえ、「娘に受験資格を与えて下さる」大公の寛大さに感謝する形で、シャルロッテに理論・実技を含めた公式医師認定試験を受けさせることに成功、1814年11月12日に彼女にヘッセン大公医師会から正式な開業許可証が交付された。

見事に期待に応えた娘のため、ダミアンはさらに1815年8月21日付でギーセン大学に彼女の学位取得が可能であるかを公式に問い合わせた。医学部長ヴィルブランド教授 (Johann Bernhard Wilbrand, 1779–1846) は、同僚達と慎重な討議を重ねた。シャルロッテの希望で、医学博士学位は産婦人科の領域に限定すること、また試験料は通常の3分の1 (144グルデン) に決まった。同僚内でもめたのは、公開討論 (= 口頭試問) を実施するか否かで、当初免除させる意向だったが、シャルロッテと彼女の指導教授リトゲン (Ferdinand August Max Franz von Ritgen, 1787–1867)²⁰⁾ はむしろ公開討論を希望した。結局、ふたりが希望するなら実施しても良からう、と意見がまとまったが、前述した母の重傷やチフス大流行により延期を余儀なくされた。1年半後の1817年1月にギーセンに嫁いでいた妹ヘンリエットの初産を成功させた後、同3月26日、シャルロッテは子宮外妊娠についての論文を提出するとともに、ギーセン大学医学部での公開討論に臨み、念願の医学博士号を手にしたのだった。

実はシャルロッテ以前にも、公開討論と学位論文によって正規医学博士号を取得した女医がドイツには存在した。啓蒙思想家で医師 Ch. P. レポーリン (1689–1747) の娘としてクヴェトリンブルクに生まれたドロテア・クリスティアーナ・エルクスレーベン (Dorothea Christiana Erxleben,

20) リトゲンは産科への女性進出に積極的であり、助産師学校の初代校長にもなっている。1815年にシャルロッテの母ヨゼファに名誉博士号を授与したのも彼であった。

旧姓レポーリン、1715–1762)²¹⁾である。彼女は、1741年にプロイセン国王より特別に大学入学許可を得（ただし実際に通学することはなかった）、1749年に匿名で女性が学ぶことを正当化する論駁書『女性の教育に関する理論的考察 *Gründliche Untersuchung der Ursachen, die das weibliche Geschlecht vom Stud[i]ren abhalten*』を刊行した。父亡き後も、牧師で病気の夫を支えるため診療を続けていたが、同業者から無免許の不法医療行為として告発されたことを受けて、学位論文を書き上げ、ハレ大学に提出する。1754年5月、同大学医学部でのラテン語公開討論に満場一致で合格、6月に正式な医学博士号を授与された。これがいかに例外的措置であったかは、次にハレ大学医学部を女性が卒業したのが1901年だったといえはわかるだろう。ドイツで女性が医師の国家試験受験を認められたのは1899年だが、プロイセン国内の大学医学部が女子学生を受け入れたのは、1908年の冬学期以降である²²⁾。女子の高等教育には、国王や学長・学部長など男性権威者の理解が必要であることはよく指摘されているが、妻と娘の学位授与に尽力したダミアンの存在は、ジェンダー学領域でもほとんど知ら

21) クヴェトリンブルクのクロプシュトック・ハウスにおける最新展示資料 (*Dr. Dorothea Christiana Erxleben, ein ganz normales Ausnahme-Leben*, 2008) ほか参照。Emmy Kraetke-Rumpf による歴史小説風伝記 *Die Ärztin aus Quedlinburg. Das Leben der D. C. Erxleben* (1992) あり。作家 Renete Feyl (1944– ドイツ啓蒙期に生きた知的女性を主人公にした歴史小説、ノンフィクションが多い) の初期作品 *Der lautlose Aufbruch: Frauen in der Wissenschaft* にも1章分の言及がある。なお英語圏の資料、たとえば Hurd-Mead/ Kate Campbell: *A History of Women in Medicine*. Conn (Haddam) 1938 にもエルクスレーベンおよびシーボルト母子の名は出ているが、いずれも数行の言及に留まる（本資料提供者で研究分担者・小川眞里子氏に感謝する）。

22) *Dr. Dorothea Christiana Erxleben, ein ganz normales Ausnahme-Leben*, hier S.24. ドイツの大学が女性を受け入れるのは、まず1895年に聴講生として、その後、正式学生として最初に入学許可をしたのがバーデンで1900年、エルクスレーベンやシーボルト母娘が住んでいたプロイセンおよびヘッセン州は受け入れが最も遅く、1908年であった。

れていない。彼や指導教授リトゲンについては、近代ドイツにおける女医教育の点から、評価しなおす必要があるだろう。

シャルロッテの名声は高まり、ヨーロッパの各王室の世継ぎ誕生の立ち会いも度々要請された。彼女が立ち会った有名なお産と言えば、ロンドン・ケンジントン宮で生まれ、後にイギリス女王となるヴィクトリア（1819年5月24日生）およびその数ヵ月後、コーブルク郊外の城で生まれ、後に彼女の夫となるザクセン＝コーブルク＝ゴータ公子アルベルト（英語読みはアルバート、同年8月26日生）のふたりが挙げられるだろう。

シャルロッテは父ダミアンの死から4ヶ月後、41歳の時に14歳年下の軍医アウグスト・ハイデンライヒ（August Heidenreich, 1802? -1880）と結婚したが、ふたりの間には子供はなかった。結婚後も変ることなく医師として活動が続けた——貧しい人々への慈善医療にも尽力した——シャルロッテは、1859年7月8日に永眠した。

5. シーボルト家の三男バルテルと四男エリアス

本節では、長兄クリストフ、次兄ダミアンに続くシーボルト家の三男バルテル（Barthel von Siebold, 1774-1816）と四男エリアス（Elias von Siebold, 1775-1828）について言及する。バルテルとエリアスも、まずヴェルツブルク大学に入学し、医学部に進んだ²³⁾。ふたりとも、父カスバルと病理解剖学者ヘッセルバッハに解剖学と外科学を学び、長兄クリストフの生理学や食餌療法の講義を聴いた。バルテルは1793年に、エリアスもその2年後に当時医学部の評判の高かったイエーナ大学に移籍した。

イエーナ大学は1780年代末にはすでに解剖劇場を完備し、カール・アウグスト公の侍医でゲーテの師でもある優れた解剖学者ローダーが活躍し

23) 本節の主要参考文献はハンス・ケルナー著『ヴェルツブルクのシーボルト家』（1967）である。

ていた。バルテルとエリアスはこのローダーのもとで外科学を、フーフェラント (Christoph Wilhelm Hufeland, 1762–1836) のもとで病理学と症候学の講義を聴き²⁴⁾、助産学はシュタルクから学んだ。1779年にアウグスト公が設立した産院ではローダーの助産技術の授業が行われる一方で、助産婦や新米医師を対象にした実践的教育も行われており、シュタルクは主に診療科に携わっていた。

バルテルの博士論文は唾液の体系を明らかにしたもので、ここには耳下腺の手術に役立つ銅版画も添えられた。彼はこの論文をヴェルツブルク大学に提出し、1797年に博士号を取得した。この研究は、ローダーをはじめ多くの研究者から高い評価を受け、専門誌にも取り上げられた。学位取得後ベルリンでさらに解剖学と外科学を勉強して戻ったバルテルは、父の後押しもあり、解剖学と外科学の助教授に就任するとともにユリウス病院の専属医師としての職を得た。1797/98年の冬学期には、ローダーに手ほどきを受けた病理解剖学について、初の講演を行った。1798年に兄のクリストフが死去すると、一時は生理学講座も兼担した。

一方、四男エリアスは当初イエーナでの学位取得を考えていたが、様々な事情から断念せざるをえず、1797年10月よりゲッティンゲン大学に移籍した。ゲッティンゲン大学を選んだのは、産科学にオシアンダーがいたからである。同大の有名教授が行う授業、たとえばリヒテンベルクの物理学、ブルーメンバッハの自然学、リヒターの外科学も聴講した。エリアスはリヒターの講義を明解さと体系的という点でローダーより評価したが、彼が病院にまったく姿を見せないことに驚いた。ゲッティンゲンでは実践的な外科教育は未だなされていなかったのである。足を骨折した患者の治療は町の外科医の仕事だった。帰郷の旅の途中に立ち寄ったマールブルクでは、小さいがとても清潔で機能的な産院を見学した。

24) フーフェラントはゲーテ主催の金曜会で『長寿法 *Makrobiotik*』の「有機的生命」について講演し、アウグスト公から高い評価を受けた。Körner, S.162.

故郷に戻ったエリアスは、父の弟子で兄クリストフの後任ヨーゼフ・ニコラウス・トーマン（Joseph Nicolaus Thomann, 1764–1805）の医学診療科を訪れ、父の監督下、産院の仕事や実習生の教育に携わった。1798年10月、彼はニコラウス・アントン・フリートライヒ（Nicolaus Anton Friedreich, 1761–1836）と兄バルテル、父カスバルを相手に公開討論を行い、博士号を授与された。論文の評価は高く、診療指導や助産師の授業の依頼も増えた。翌年8月には市町村および国家の正規助産師長に任命され、同時に治療学と産科学の助教授となった。1799/1800年の冬学期には産科学の理論と実践の授業だけでなく、医薬品についても論じ、産院での実習にも力を注いだ。兄クリストフが手がけていたお産椅子の研究を、最新の情報を付け加えて完成させたのも彼である²⁵⁾。ちなみに私生活では、バルテルは1799年にマルガレーテ（Margarete von Siebold geb. Schmitt, 1779–1849）と、エリアスは翌1800年にゾフィー（Sophie von Siebold geb. Schäf[f]er, 1779–1816）とそれぞれ結婚した。

こうしてふたりは、父の監督のもと医師としてのスタートを切った。両者は実務をこなしながら、医学の発展のためにも活動した。兄クリストフ亡きあと、バルテルは解剖学、外科学、産科学の分野で年老いた父を支え、父の得意分野であった結石切除手術や眼科手術のサポートも行った。バルテルの友人ランゲンベックは、このシーボルト父子の結石切除手術を注意深く観察し、『結石手術の簡潔で確実な方法 *Über eine einfache und sichere Methode des Steinschnittes*』（1802）にまとめた。オランダ語にも翻訳され、これを読んだオランダ人医師たちに積極的に採用されたという。バルテルも自身が執刀した手術2例を『新ヴュルツブルク教養通信 *Neue Würzburger Gelehrte Anzeigen*』で紹介している。父のもとで眼科学もきわめたバルテルは、1802/03年の冬学期に眼科診療科を設立し、角膜のぶ

25) 『彼によって考案された新しいお産椅子についての論述 *Abhandlung über den neuen von ihm erfundenen Geburtsstuhl*』と題されたこの本は1804年に出版された。

どう膜腫を除去する外科用メスを製作した。また、報告によれば、1810年以降、毎年20件以上の白内障手術を実施している²⁶⁾。

父とバルテル、その弟子たちの努力で医学部と病院の水準は急上昇し、見学のために多くの医師や教授がヴュルツブルクを訪れた。1804年3月28日付の『医学外科学官報 *Intelligenzblatt der medizinisch-chirurgischen Literaturzeitung*』には、ヴュルツブルク大学医学部の現状、とくに外科手術、眼科手術、結石切除手術に関する記事が掲載されている。これに続く時期にはとくに治療学の領域に関心が集まった。1806年1月には念願の新手術室が完成し、治療と教育の環境はさらに充実した。翌年4月の父カスパル逝去を受け、バルテルはユリウス病院の外科医長となった。

大学の繁栄は喜ばしいことだったが、バルテルと父が願っていたのはドイツ全土における医学の発展であった。父が亡くなる1年ほど前から、バルテルは「ドイツ外科アカデミー *die deutsche Akademie der Chirurgie*」設立に意欲を燃やしていた。パリ外科アカデミーを模範に作成された彼の綿密な計画書は多くの外科医に好意的に受け入れられた²⁷⁾。フーフェラントも、自身がこの団体の一員となることを楽しみにしていた。新アカデミー会長の有力候補は父カスパルであったが、政府は、すでに同種の施設が存在することを理由にバルテルの提案を却下した。支援を見込んでいた人々からも良い感触は得られず、最終的にバルテルはこの計画を断念せざるを得なかった²⁸⁾。

26) 1810年21件、1812年27件、1813年には23件の手術が実施された。

Körner, S.191.

27) 父カスパルは1781年よりパリ外科アカデミー会員である。すでに1785年にウィーンにもアカデミーが設立されていた。Körner, S.178.

28) ローダーはバルテルの計画が大きすぎることに懸念を示した。また、『医学外科学新聞』の発行者で教授のヨハン・ヤーコプ・ハルテンカイル (Johann Jacob Hartenkeil, 1761-1808) は基盤が不確実であるとして、彼に計画を思いとどまるよう助言した。Körner, S.182.

「ドイツ外科アカデミー」設立の計画は実現しなかったものの、1812年にはヴェルツブルクに「祖国医師技術協会 *der vaterländische ärztliche Kunstverein*」が結成され、バルテルも密接に関与した。これは1810年に結成されたドイツ全体を包括する連盟の下部組織で、会員になれば治療学の最新状況や実践方法などを知ることができた。

なお、バルテルの功績で忘れてはならないのは、彼が編集や執筆にも積極的に取り組んだことである²⁹⁾。恩師から引き継いだ『新ヴェルツブルク教養通信』の編集と並行して、彼自身も診療から得られた考察や、1798年10月から1800年4月までの18ヶ月間にユリウス病院を訪れた患者数とその症病に関する報告などを書いた。また、父がド・ラ・フェの遺品から購入した医療器具を模写した45枚の銅版画を『外科の医療器具 *Instrumentarium chirurgicum*』としてまとめ、さらに最新の医療器具の紹介とその使用方法、診療科での利用状況について紹介することも計画していた。1805年には雑誌『ヒーロン *Chiron*』と『珍しい厳選された外科学的観察・経験集 *Sammlung seltner und auserlesener chirurgischer Beobachtungen und Erfahrungen*』を創刊した。後者には、医療現場の日常から得られるさまざまな所見が収められることになっていた。1805年に出版された第1巻には、著名な外科医の投稿、カスパルの日記からの抜粋、バルテルの日誌に記された症例などが掲載されている。『ヒーロン』には主に外科の専門的な論文を掲載し、教育的指導的側面を持たせようとした。教育的という観点では、戦争時の負傷者治療の際に得られたさまざまな経験を記したのも読者には有益だった。一例をあげると『医学外科学新聞 *Medizinisch-chirurgische Zeitung*』に掲載された切断と縫合を時間との関係で述べた論文は、1813年に負傷兵の治療に奔走する最中に書き留めたものである。翌年、野戦病院でチフスにかかったバルテルは、40歳の誕生日を目前に控えた1月28日にこの世を去った。

29) 彼の執筆活動は医学関係のものに留まらない。父の伝記だけでなく、広くドイツの芸術家、音楽家、作家の伝記的作品も書いている。

エリアスは1799/1800年の冬学期から医学と産科学の助教授に就任し、以後とくに助産技術の向上と助産婦教育に力を注いだ。大学の授業では、これまで扱われなかった、出産に至るまでの各過程に必要な指導や出産のさまざまなケースをとりあげた。正教授に昇格した直後の1803年にこれらの内容を『助産技術の実践について *Über praktischen Unterricht in der Entbindungskunde*』としてまとめている。入門書としては、当初はイエーガーシュミットやヴィーデマンを、1808年以降はエリアス自身の教科書を使った。ちょうど同じ頃、エリアスが仕事をしていた産院の拡張計画が持ち上がっている。産院の拡張は、妊産婦のみならず、学生の教育にとっても願ってもないことだった。紆余曲折を経て、エリアスが見つけた修道院廃絶により廃墟となっていた聖アフラ修道院が候補地となったが、建物が大きすぎることと学生の通学に不便であるという理由から、修道院の計画は白紙に戻された。思いもよらぬ展開にエリアスは憤ったが、それでも彼は、ハレ大学やドレスデン大学からの招聘を断り、この地で産科学と助産婦教育に力を注ぐ決意を固めた。1805年初頭、癩痢患者病棟のある場所が最終的に候補地に決まり、9月に竣工した。この施設には国庫とグッテンベルク財団から補助金が出された。

助産婦教育に関して特に重要なのは、エリアスが事務官を務めていた衛生部局に提出した助産師制度と産科学全般の問題に関する報告書であろう。その内容は『ヴェルツブルク助産婦学校の歴史 *Geschichte der Hebammenschule zu Würzburg*』(1810)に詳しい。それによると彼は、知識と技量を備えた助産婦の育成のために次のような義務を課すことを提案している。助産婦、あるいは助産婦を目指す者はすべてヴェルツブルクの学校で教育を受けること、統一教科書の使用、ふたつの教育課程を受講すること(1月から復活祭までの時期と復活祭後から秋の収穫期前までの時期にそれぞれのひとつの課程を修了)、産院での実習、である。この提案によってドイツにおける助産婦教育とその制度化の基礎が形作られたと言ってもよいだろう。ちなみに統一教科書として、エリアスの『助産技術教本

『*Lehrbuch der Hebammenkunst*』が1816年から1844年まで用いられた。1819年には銅版画一枚が添えられ、内容もさらに充実した『助産婦の授業のための産科学教本 *Lehrbuch der Geburtshülfe zum Unterricht für Hebammen*』が出版された。

これらの教科書はもちろん、エリアスは編集・執筆の面でも産科学、助産技術の進歩に貢献した。この関連で重要なのは、最初の産科学の雑誌『ルツィーナ *Lucina*』の刊行である。1802年11月にライプツィヒのフリードリッヒ・ゴットホルト・ヤコベア出版から出された創刊号には、編集者の論文5点と医療の最新事情が載っている。また、彼は父や兄たち同様、医療実務での経験とそこから得られた発見・知見を重視し、『年報 *Annalen*』で伝えた（1806年には『ルツィーナ』に組み込まれた）。他には、大学の講義をまとめた『産婦人科疾患の認識と治療のための教本 *Handbuch zur Erkenntniß und Heilung der Frauenzimmerkrankheiten*』（1811）が挙げられる。

さて、戦争による不安定な状況のなか、ナポレオン戦争で失われた物質的な面を精神的な力で補おうという願いも込めて、ヴィルヘルム三世はベルリンに大学新設を決定した。この計画を任されたヴィルヘルム・フォン・フンボルト（Wilhelm von Humboldt, 1767-1835）は優れた人材を確保すべく、ドイツ全土の大学を調査させ、その結果エリアスも産科学講座の候補者の一人となった。ヴェルツブルクのような産院がないことを理由に、当初ベルリン行きに乗り気ではなかったエリアスも、最終的には招聘を受けた。1816年10月エリアスはベルリンに赴任、新生活を始めたが、同年末には妻ゾフィーの早すぎる死を体験しなければならなかった。エリアスが何よりも望んでいた独立した産院の設立には、一部の勢力が反対した。ここベルリンでは18世紀から、助産婦教育は外科教授の指導下にある産院で行われていたので、必要な実地指導は「シャリテ」（ベルリン大学病院）で補えば十分である、というのが彼らの主張だった。病院と産院の共存から生じる様々な難題を知っていたエリアスは、あくまでも両

者の分離を主張した。最終的には、内務省の教育部門担当の支援を得て、オラーニエンブルク通りの家が産院となり、外来患者診療部も併設された。1817/18年の冬学期には、この産院で学生対象の専門授業も行われた。

上述した助産婦教育の基盤作りや医学雑誌刊行、産科学・助産技術に関する専門書や教科書で、エリアスの名は広く知られていたが、ベルリンでの活躍によって彼の評価はさらに高まった。特に1819年に後のハノーファー王となるゲオルク五世を難産の妃から無事にとりあげてからは、一般の人々にも知られる存在となった。1818年には初の人為的早産を試みた。このケースでは残念なことに子供は死亡したが、1823年のケースでは母子ともに命を取り留めた。ベルリンで最初に子宮摘出手術を行ったのもエリアスである。このような処置・診療については彼の『産科学ジャーナル *Journal für Geburtshülfe*』に掲載されるとともに、毎年、本省にも報告された。さらに晩年の業績として、産褥熱の原因の14の可能性を考察した論文、1827年に始められた『医学百科事典 *Encyclopädisches Wörterbuch der medizinischen Wissenschaften*』の7項目の執筆が挙げられる。短い闘病の後、1828年7月12日エリアスは53歳の生涯を閉じた。

6. 今後の展望 近代日本の女医とドイツのかかわり

以上、ヴェルツブルクのシーボルト一族について、限られた紙幅での紹介を試みてきた。今後は本論を手がかりに、まず近代日本の女医とドイツの関わりを明らかにしていきたい。楠本イネが日本における西洋医学を修めた女医第1号であるとするれば、明治政府による医術開業試験実施後、公許女医登録第1号（1885年）になり、本郷・湯島に産婦人科医院を開業したのは萩野吟子（1851-1913）であった。誰もがいわゆる「玉の輿」と羨む結婚をした彼女が、夫に淋病をうつされ、男性医師による治療の屈辱

の経験から、医師を志したことは有名である。しかし荻野を例外的存在に留めることなく、その後も継続して女医が育つ基盤を用意した人物としては、女医登録第3号の高橋^{みづこ}端子（1852-1927）の役割こそ重要であろう。高橋は、当時湯島にあった私立医学校・濟世学舎前で三日三晩立ち通し、校長・長谷川泰と直談判の上、女性の入学を認めさせた。この結果、1884年から1900年までに70余名の女医が濟世学舎から巣立った。このうち公許女医第27号・吉岡（旧姓・鷺山）彌生が、1900年、再び女性に門戸を閉ざした母校・濟世学舎に代わって、ドイツ語塾至誠学院内に日本初の医学を志す女性のための教育機関・東京女医学校（東京女子専門医学校を経て、現在の東京女子医科大学となる）を設立した。ドイツ語塾内での開校は、彌生自らドイツ語を学んだ縁で、ドイツ語教師で至誠学院校長の吉岡^{あらた}荒太と結婚していたことによる。

話は前後するが、さらに高橋端子は私費で日本人女性医師として初のドイツ留学も果たした。もっとも彼女が到着した1890年当時のベルリン大学は、未だ女性に入学を許可していなかった。だが、ここでも彼女の真剣さと半ば体当たりの直訴が功を奏して、最終的に聴講生として医学講義参加が認められている³⁰⁾。なお当時、不成功に終わったものの、ウィーン大学に高橋の受け入れを打診したのが、同じくベルリンでロベルト・コッホに師事していた北里柴三郎（1853-1931）だった。この北里、実はドイツ・マールブルク大学に留学し、日本女性として初の医学博士号を取得した^{うらただ}宇良田唯（1873-1936）とも密接な関わりがある。1898年に公許女医登録第61号となった宇良田は、北里の紹介で彼のかつての同僚ベーリンク（Emil Adolf von Behring, 1854-1917）の勤めるマールブルク大学に

30) Vgl. Hartmann, Rudolf: *Japanische Studenten an deutschen Universitäten und Hochschulen 1868-1914*. (Berlin, Mori-Ogai-Gedenkstätte, 2005) にも聴講生としての記録が確認されている。„TAKAHASHI Mizuko. (...) GH [=聴講生] SS 1890-WS 1891/92 Medizin, Gynäkologie/ U Berlin.“ (S.184)

特別許可を得て1903年夏学期から在籍³¹⁾し——聴講生はともかく、女性の正式な在籍は未だ許されていない——、1905年冬学期に34頁の眼科論文『いわゆるクレード点眼液の効果に関する実験的研究 *Experimentelle Untersuchungen über den Wert des so genannten Credéschen Tropfens*』を提出、正規医学博士号を授与された。結果的に彼女は、マールブルク大学における初の女性正規博士号取得者にもなっている³²⁾。帰国後、北里夫妻の媒酌により、北里門下の薬剤師と結婚、中国・天津に同仁病院を新設、夫と共同経営した。海外で長期間勤務した日本女性医師としても、彼女が先駆的な存在であることは言うまでもない³³⁾。

なお本論は主として「女医」をキーワードに展開したが、今後の更なる研究課題として、シーボルトの叔父達が留学した当時、ゲーテの主君カール・アウグスト公統治下のザクセン・ヴァイマル・アイゼナハ公国領内に設置された初の助産院 (Accouchierhaus) とイエーナ大学医学部スタッフの活動を明らかにするとともに、研究協力者・眞岩の研究対象で、日本ではカスパー・ダーヴィト・フリードリヒらと比較するとまだ知名度の低い、ロマン派画家にして産婦人科医師兼教授であったカール・グスタフ・カールス (Carl Gustav Carus, 1789–1869) についても紹介を試みたいと考えている。

31) Ibid., S.210. なお宇良田については、慶應義塾大学メディアセンター・日吉レファレンスおよび北里記念室にもご協力いただき、高橋端子とあわせ、別途詳しい経歴紹介を計画中。なお、中間報告は2010年11月25日、ベルリン・フンボルト大学附属「森鷗外記念館」で口頭発表済み。
Ishihara, Aeka : *Japanische Medizinerinnen in Deutschland von 1890 bis 1905. TAKAHASHI Mizuko und URATA Tada.*

32) Metz-Becker, Marita: *Frau Doktor hinterm Fenster*. In: Uni Journal Marburg, Oktober 2008, hier S.37.

33) ふたりのドイツで学んだ日本女性医師への関与とともに、北里が初代学部長に就任した慶應義塾大学医学部開設時 (1919)、女性3名の入学希望者があったが、議論の末、結局入学を拒否されたという記述 (Vgl. 日本女医会編：『日本女医史 (追補)』1991, S.307) も含めて、彼の女子教育観という視点から興味深く、改めて資料の分析・検討が必要と思われる。